

終わりの直前

秋ともなれば風清く
食道楽の人群れは酒をあおり
秋ともなれば空高く
恋人たちは適度な哀しみを求め
秋ともなれば・・・
何故か人は少しだけがいてみる
何故か人は少しだけ手を伸ばしてみる
けれど 立ちつくす者はなく

秋ともなれば水面は滑らかで
官能さえも色あせている
秋ともなれば死は遙かに遠退き
干からびた生が想いをはせる
秋ともなれば・・・
何故か人は少しだけ苦痛をなめてみる
何故か人は少しだけ振り向いてみる
けれど 待つ者はなく

私はと言えば、ただ為す術もなく
過去が私を追い抜いてゆくのを見送るばかり
ああ、あれに追いつくのは容易なことじゃない
ましてや現在など 見晴るかせるわけがなく
常人にとっての未来の比ではない

弱々しさの膨大なトゥッティがなだれ落ち
散らばる汚穢を掃き清める者として居らず
聖天してゆくのは、ただその悪臭ばかり
天国の扉もこれでは開くはずもなく
鼻つまむ守衛の歪む顔が目に見え

(ああ、「生き長らえる」とはこういうことか・・・)

秋ともなれば！
場違いの乱痴気騒ぎか、さもなくば

大声あげての号泣か
痛みというものに怯えながら
どうして葉末にしたたる甘露にしっぼりと
濡れたままに耐えていられるものだろうか
しかも
もの哀しい詩など口ずさみながら？

ああ、秋ともなれば風清く
うつむく者も多くなる
秋ともなれば空高く
諦められる者が救われる
秋ともなれば・・・
諦められる者のみ救われる

(1989.10.8)